

山地は日本の国土のおよそ4分の3を占めている。日本では過去、生活を送りやすい土地である平原が不足していたため、人々は、人里離れた山岳地帯で農業や生活を営むのに適応した、資源に富む地域性を作り出した。地域社会は、その土地が直面する課題に対応し、山の原生地域に近接した地の利を活かすため、特別な伝統を生み出した。こうして出来た村を山里と呼び、山里を囲む、野原や森林を手入れした場所は、里山と称された。

伝統的な里山の慣行の例として、刈り取りが挙げられる。地元住民は炭となる木材を供給するため、10～20年ごとに、オークなどの成長の速い落葉樹を伐採した。伐採後の木は再度成長できる状態にし、繰り返し、古い切り株から新たな芽を生育した。芽は、はりめぐらされた木の根に蓄えられたエネルギーを使い、素早く再生する。結果として、刈り取られた木は、種子や苗木を植えなおす場合と比較して、大幅に速い速度で、採取可能な元の大きさまで成長するのだ。林床には、葉や、折れた枝がたまるため、毎年これを集め、燃料や肥料のもとにした。

里山の土地管理の慣行は、自然とバランスを取りながら共存する生活様式を反映しており、地域の生物多様性を維持するうえで重要な役割を果たしている。例えば、稲田、貯水池、灌漑用水路は、留鳥や渡り鳥の餌場や繁殖地になると同時に、カエル、ホタル、トンボなどの生物のライフサイクルにとっても不可欠な場所である。屋根ふきための高草を収穫することで、日光の取り合いがなくなるため、背の低い野草の再生が促される。里山の人々は、在来種と共存し、これを手助けしながら、自らのニーズを満たす手法を見出してきた。

高齢化が進み、若者が田舎より都市での暮らしを選ぶようになったので、今日では、里山の慣行は希少なものとなりつつある。それでもなお、多くの人の心には、伝統的な生活様式や風景の、のどかなイメージが残っている。現在、里山の生活様式を維持したり、里山の知恵を活かして、生物多様性を保全しながら自然環境を利活用できる地域社会を構築したりするために、多くの組織による取り組みが行われている。1つの例が、環境省と国連大学サステナビリティ高等研究所の合同プロジェクト、SATOYAMAイニシアティブである。